

## プログラム・ノート

奥田佳道

国内外で創造という名の翼を広げる葵トリオ。2月はハワイ公演も賞賛に包まれた。2027年のベートーヴェン没後200年を意識したピアノ三重奏曲全曲演奏「7年プロジェクト」も佳境。「運命」「田園」、チェロ・ソナタ第3番に続く作品番号をもつ「幽霊」が開演を彩るとは贅沢。マルティヌーが1950年代にアメリカで手がけた秘曲、急逝した親友に捧げたショスタコーヴィチの逸品も公演の主役を演じる。

### ベートーヴェン：ピアノ三重奏曲第5番 ニ長調 作品70-1「幽霊」

少々誤解を招く「幽霊」(独語Geister、英語Ghost)なる愛称の生みの親は、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770～1827)から教えを受けた鍵盤の匠カール・チェルニー(1791～1857)と言われるが、ニ短調を基調とする第2楽章ラルゴは、なるほど冥界的で悲歌の趣をもつ。趣あるトレモロや半音階の動き、効果的に響く長音が、当時の聴き手を“怖がらせた”のは想像に難くない。そして第1、第3楽章を貫く緻密な激情、覇気にあらためて驚く。全3楽章。

### マルティヌー：ピアノ三重奏曲第2番 ニ短調 H. 327

フランスとアメリカが長かった20世紀チェコの多作家ボフスラフ・マルティヌー(1890～1959)は、生涯に都合4曲のピアノ三重奏曲(ひとつは牧歌集と題されている)を紡いだ。第2番は1950年、マサチューセッツ工科大学のハイドン図書館のオープンを祝って書かれ、同工科大に献呈された。作曲者が60歳を迎えようかという時期に書かれた彫りの深いピアノ・トリオで、シューマン、ベートーヴェンにオマージュを捧げたかのような調べも、アンダンテの第2楽章でピアノが奏でるコラル(聖歌)ふうの調べも素晴らしい。第3楽章のモダニスト的な疾走感、無窮動風の創りは、ショスタコーヴィチのスケルツォに通じる。全3楽章。

### ショスタコーヴィチ：ピアノ三重奏曲第2番 ホ短調 作品67

他界した恩人、友人を想いピアノ三重奏曲を書く、そして捧げるというロシアの伝統(チャイコフスキー、アレンスキー、ラフマニノフの名作をあげるまでもない)に沿った作品で、内に外に烈しい。

交響曲第8番を発表したドミトリー・ショスタコーヴィチ(1906～75)は1944年2月、親友の音楽学者イヴァン・イヴァノヴィチ・ソレルチンスキー(1902～44)が「シベリアの首都」ノヴォシビルスクで急逝、という衝撃な一報に接する。ショスタコーヴィチは前年1943年の晩秋からこのピアノ・トリオを作曲していたが、ソレルチンスキーの死からややあつて創作を再開。第3楽章に哀しみを映し出すパッサカリア(低音の反復を交えた3拍子の変奏舞曲)、第4楽章にユダヤの古謡や魔法を織り込みながら曲を完成させた。全4楽章。

(おくだ よしみち・音楽評論)